

芥川全集「手帳（六・七）」未収録分

【梗概】 新版全集未収録分の翻刻及び書簡、『支那遊記』、『湖南の扇』をめぐる注釈

水沢 不二夫

はじめに

神奈川県藤沢市の文書館所蔵の芥川龍之介「手帳（六・七）」には、新版全集——『芥川龍之介全集 第二十三卷』（岩波書店、一九九八（平成一〇）年一月）との差異が認められる。本稿ではこの差異を可能な限り明らかにしてみたい。

元版全集の月報第八号の「編輯者のノオト」には次のように記されている。

○手帳。約十冊の手帳を整理したものである。手帳の表紙の裏にある曆によつて、それぞれの年代は解つたけれども、それは明記しないで置いた。そして唯、それらをその年代順に並べて置くに止めた。それは例へば大正五六年度の手帳にも、ずつと後年になつて書かれた事の確かである部分が少くないためである。これらの手帳は、大抵走り書きで、實に字が汚なく、それらを判讀するのには随分骨を折つたのである。それでも不明だつた箇所は少くない。そのため「センパンスの分らないものは止むを得ず削除し、どうにか意味の分る様な

ものはその不明の文字だけ□印をもつて代へた。又、發表の差支へのあるやうな箇所は適當に伏字にして置いた。猶、○印は我々が打つたものである。それから圖は全部省略した。それは共に、別冊の原稿があまり多過ぎたため、手帳にのみ充分な頁を與へる事が出来なかつたからである。（傍線水沢）確かに全集の省略は主に芥川の描いた挿し絵・図と、その注記である。しかし詳しく調べてみると、全集には注記のみの翻刻もあり、判読困難というのが理由であるうが、この方針は不統一である。そこで今回も判読不明箇所は多々残つたが、挿画・図の注記も可能な限り翻刻してみた。紙面の都合と、原資料のインクの滲みにより、挿画・図は今回も一部しか復元できなかったが、少しでも原資料の雰囲気が伝わればと思う。

判読には『支那遊記』、『湖南の扇』、書簡などの身邊資料が非常に参考になつたが、一個人では読めないものも複数で検討すればより解明されるだろう。本稿はせめてその際の叩き台にでもして貰えれば幸いである。この「手帳」の分析は旅程の分析とともに、旅行記の構成や虚構性などの分析の基礎を成す筈である。写真版と翻刻とを備えた資料の出版が望まれるが、インクの滲みがあま

りにも酷く、現在の技術では困難かもしれない。

なお、〈前回全集⑫〉の「後記」には「普及版全集所収本文は「手帳」の抄録であり、體裁も元版全集のそれとかなり異なるがその異同については一々注記しない。（小型版全集は元版全集に據つている。）」とある。

* * * * *

芥川 の原資料「手帳（六・七）」は、長らく現存しないものと考えられていた。所蔵者の芥川の甥の葛巻義敏氏の自宅の火災によつて焼失したとされていたからである。しかし、氏の没後、約三千点にも及ぶ資料が妹の葛巻左登子氏に引き継がれ、更にその晩年に藤沢市に寄贈された。現在もその整理が進行している。「手帳」もこのなかで発見された。新版全集の「後記」によれば、編纂時には「破損の度合いが激しく、判読不可能の箇所が多いために」、底本として採用することができず、元版全集が底本とされたらしい。しかしその後、藤沢市文書館によつて脱酸処理、マイクロフィルム化などの資料の修復・保存が進められ、その一部は公開が始まつた。マイクロ・フィルムはプリントアウトした物の製本も作られ、「手帳（六・七）」も簡便に見られるようになった。原資料はエンキヤブレーションもされており、予約して許可を得られれば手にとつて見ることも可能である。

原資料の「手帳（六）」は、大坂毎日新聞社発行の「社員手帳の一九二一（大正一〇）年版を使用している。日付は無視して、後部より左から右への縦書きという変則的な記述形態を原則としている。四月十一日から三十日分と、五月三十一日から六月五日分、十一月六日から同十五日分が現存しないが、その変則的な記述形態により、日付と内容とは関係していない。内容は主に『支那遊記』の「上海

遊記」「江南遊記」「長江遊記」「雜信一束」、および『湖南の扇』の素材となつた中国旅行メモである。新版全集の「後記」にはこのメモと関わる作品として「影」（一九二〇年九月「改造」）も挙げているが、一九二一年版の「社員手帳」にあるというのは不自然であろう。「手帳（七）」は表紙も遺失し、発行所も不明である。「手帳（六）」と同様に後部より左から右への縦書きという変則的な記述形態を原則としている。内容は『支那遊記』のうちの「北京日記」の素材となつた中国旅行メモである。

原資料には旧版全集を切り取つた小片が十個余りも挟み込まれていた。岩波書店、或いは、旧所蔵者の葛巻義敏氏は、旧版全集刊行後も更なる判読を試みていた証であろう。その誠意には敬意を表したい。

【凡例】

- 一、底本には原資料の藤沢市文書館所蔵の「手帳（六）」を用いた。
- 一、芥川の記述が残る見開き面に「見開き」の名称とともに連続番号を付した。
- 一、岩波書店版『芥川龍之介全集 第二十三卷』との違いは主に省略であるので、その頁数と前後の記述をもつて、該当箇所を示した。
- 一、そのための全集の記述は適宜省略し、「……」で示した。
- 一、全集本文は「明朝体」、全集未収録の追補は「ゴシック体」で示した。
- 一、全集収録済みの本文と原資料との差異は、本文に傍点を付し、原資料の記述を左側に「□」に入れて「ゴチック体」で示した。（七箇所）

「手帳(六)」

- 一、判読不明及び明らかに誤記の箇所は□で示し、判読の候補の挙げられるものはその右横に「□」のように括弧に入れて示した。
- 一、判読不明の文字が多い箇所は、「約十字不明」のように、量を示した。
- 一、判読不明の行は「約二行不明」のように、量を示した。
- 一、全集の省略は挿画とその注記の部分が多く、本稿ではおよその箇所に「挿画」と記し、注記の文字は可能な限り翻刻を試みた。
- 一、その注記が全般に判読不能な場合には、「挿画・注記判読未了」と記した。
- 一、原資料の「手帳」は縦書にもかかわらず、左から右に書かれている。そのため、原版の複写を掲げた部分は照合の便宜のために、芥川の記述形態に倣う。他は全集の方針に従い、右から左に記述する。
- 一、全集にあつて、原資料の「手帳」に現存しない部分は、「手帳『遺失部』」と記した。
- 一、見せ消ちは「オガホ」などと一重線で消して示した。
- 一、原本では略字・新字が全集では正字・旧字という箇所が多々あるが、示さなかった。
- 一、稿者の能力によって判読できないものは、原資料の画像をコンピュータ上で補正処理して示した。
- 一、紙面の都合で、全翻刻を掲げることができなかった。新版全集を常に横に置いて対照されたい。

全集の頁 ← 原資料の見開き

- ……《見開き1》……
□□□ ハとま□□ひ□□
□□おひやの□れ□
□□
□□の途中を□□
- ……《見開き2》……
池崎操 久米正雄 里見弴
菊池寛 久保田万太郎 斉藤茂吉
小宮豊隆 藤森淳三 岡栄一郎
島木赤彦 中村武羅夫 岡本綺堂
佐々木茂索 滝井折柴 与謝野晶子
薄田泣菫 宇野浩二 江口渙
豊島与志雄 加藤武雄 室生犀星
南部修太郎
谷崎潤一郎
- ……《見開き3》……
池崎操
Gröva Freud



(藤沢市文書館蔵)

- ……《見開き4》……
山口縣 萩湾 肥島農園
- ……《見開き5》……
竹の雪
天津 ときわ
北京 林
- ……《見開き6》……
木の葉
○庭の空に蟬一声や月明か
ささ□□□やひ
□衫(衣) □衣
乙より多し た□□□□
色「挿画」 水干
帷子
- 旧事記誦先代之旧辞——古事記
- ……《見開き7》……
天津河北公園後口実里門牌
二号南皮張風 張長(万里)
宗方小太郎 (上海)
周 (漢口) 岸口販口
- ……《見開き8》……
p360 荒るゝ海に鷗とび……
2435. 33
- ……《見開き9》……

p361 藍衣黒衣の支那人、倭寇

ネカネ ナイトキヤンサ

方年筆

カチ中

名刺入

中中

黄旗、赤布包の棺、ジャンク四五人、葬をおくる船

仁丹

鴨群 四つ手網(大)

□□□□

望翁

岡門著 観光紀游

p362 ……《見開き10》……

花の幸の

アカシアの芽匂ふ路ばたのアマ

「二行不明」

馭者の一人は……

千坎洞

(上海路) 山東路

章炳麟

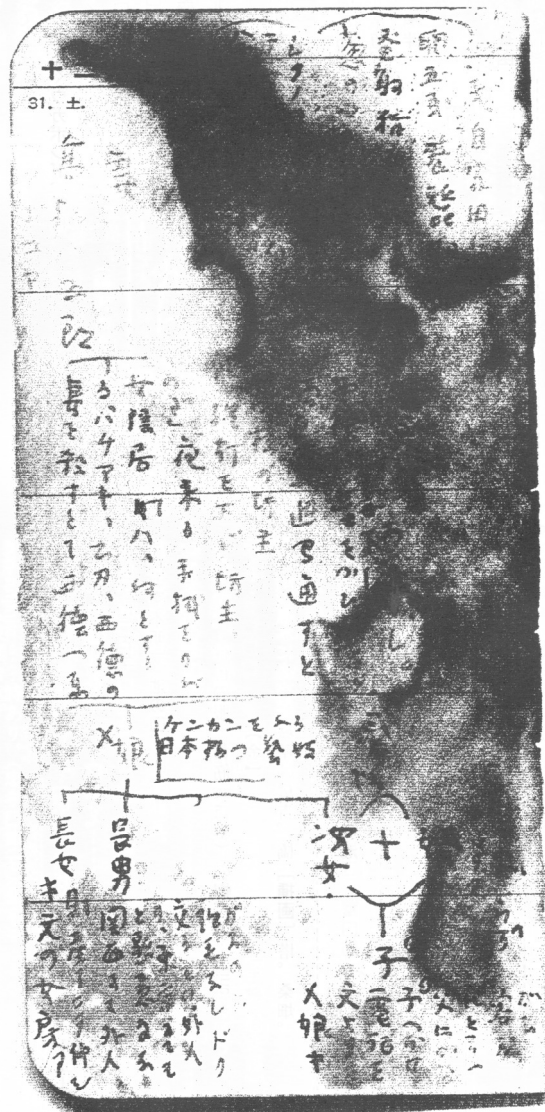
……《見開き12》……

燈籠ならび線香長し

吳景濂

殷汝兼

段内閣 前財政次長



(藤沢市文書館蔵)

p363

鄭孝胥——鄭垂

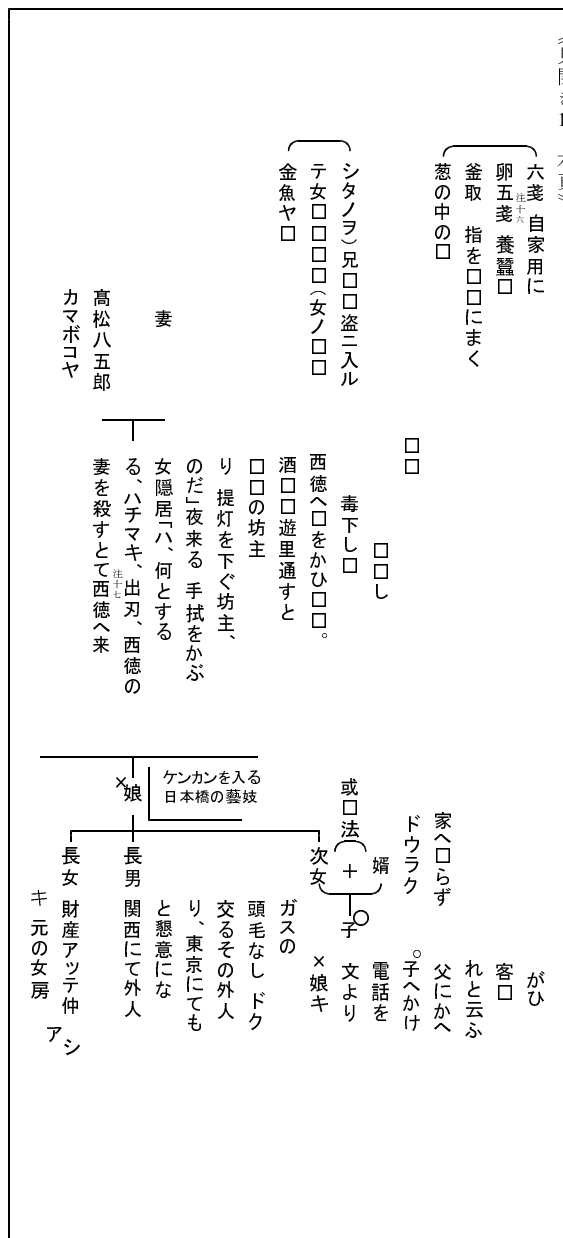
〇師友紀談、……〇浩然齋雅談

……〇浩然齋雅談 里□□□後 周密

翼 〇池北偶談、王阮亭 〇姚首源、古今偽書考
 Ku Hung Ming
 Furuno
 A. Watts

※原本は左から右への縦書きという変則的な表記となっているため、その複写を掲げるにあたり翻刻もこれに倣った。

《見開き15・右頁》



……《見開き15・左頁》

〔お□□なで〕

信濃をめぐりあるくウガボンド、学校

ピアノをひく□□□

エノグ箱を□

す(三脚)□□

□ツメテ 悪臭の「約七字不明」 tube 少□□り

中学(学)(北京)

梁隠起氏

Bridge House Hotel

李人傑

p363

小有天「天々非常道、天々小有天」……○鄭孝胥もひき立てた由。

晶旅 一年有半

小説畫報

小説大観

河南路文明書函

……《見開き17》

p363 ○鏡(金―梅竹)……枇杷 赤 [挿画]

……《見開き20》

p364 他在那、西涼国、受了苦辛……

Totem of Taboo

Psycho Pathology of Everyday life

P. Adam Schall von Bell (1591-1666)

P. Matteo Ricci 利瑪竇 (1552-1600)

李經邁 陳子墻

……《見開き21》

章炳麟 東南樓学 裕仕 章太炎先生――

……《見開き22》

(ペンキぬり)……boy 案内す。

□□王□ 古学

「約五字不明」池の□

「二行不明」

支那車掌。緑色の服。黄筋(二本)の帽。……lineを引く。

【金】

p365 ○嘉興。水にのぞむ城壁の広告。橋 [挿画] 塔。桑畑。

……《見開き25》

○魚樂園。洗心亭。 [挿画] 殿 池

……《見開き25》

○硤石……獅子牙粉

Sa□□ed to □□e Weai

○孔子廟 脇 500 前後 油炸塊

……《見開き26》

○大成殿。群青へ白。赤瓦。大廊。……臭気。蝙蝠の糞。異臭。

[挿画] 太湖石

○玄妙観。観後の画「一字不明」。后 劍術……

○盲人の胡弓……驢上の客

【駅】

p366

……《見開き27》

○棗。栗。西瓜。枝豆(茹而干)。 貝、障。 楓二抱。

【月見障子】

大海原 [挿画] 壽佛 南無□□

……《見開き29》

○酒棧。(京莊花雕)、白瓶(赤瓶上酒)。竹 [挿画]

柱 土間 瘦犬。 [挿画]

p367 ○汚水。煉瓦橋。靴を洗ふ女。……朱欄の木橋

【赤】

城壁に葛、小木。……舟に少女(玫瑰を髪にさせるもの)

【□□】

……《見開き30》

動あり、その為参詣少し。 [挿画・判読未了]

……《見開き31》

□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□

手紙のついでに
おまけのついでに
おまけのついでに
おまけのついでに

□悪坂の途中 (藤沢市文書館蔵)

□船中□□□□

浅□□北東□□□□行

□□□□□

○コシヤマクレル。トカサ。Satio.

奔牛 SMC 鄭孝胥の家 grey w red tyle

王霖珠

……《見開き32》

草の広告。入り口――太平門(赤へ白)。天蟾舞台 幕……赤面。

幕(左右)……孔明。 [挿画] silver 旦 車

……《見開き34》

○香炉峯……李白 白樂ナド 朱子 李白 ……○山下。橡 カヤの木

竹。枯カヤを天井にした路。ロバ。豚。

鷹飛□――□□人

女、傘。……且将湖水泛心頭。太湖石 劉□□ (□□

女、傘。……且将湖水泛心頭。太湖石 劉□□ (□□

女、傘。……且将湖水泛心頭。太湖石 劉□□ (□□

女、傘。……且将湖水泛心頭。太湖石 劉□□ (□□

p370 ○兵工局。……曇天胡蝶。

……

黒靴下。……西洋靴(黒)。白靴下。

……《見開き37》

大水中に入る。……黄瓦上二黒瓦。

[挿画] 赤□二 □屋台 カメ □梧桐 和柳

……《見開き38》

○湘南公立……白壘号房。 [挿画] 燈籠 周囲に□ ○成立大会

iron-sulphite……詩あり。(忠孝□節(白)朱も)

○北海碑……麓山寺碑亭(白かべ)。 [挿画]

……《見開き39》

……《見開き39》

【手帳】遺失部】

……《見開き19》
○陶然亭。古刹慈悲淨林。〔挿画〕
昌閣。城壁。芦。城外の樹木。〔挿画〕文昌閣 慈悲院 陶野
庭 庭
……《見開き21》
〔官〕
宮殿。檜。楡。石碑（亀）、乾隆御筆……（藍へ金）（康熙筆）中に
……《見開き22》
り台は大理石）……左に閨苑朱へ金。
〔挿画〕正月五、□□□□ 正月十八、□□ □神仙
……《見開き24》
p383 天寧寺の塔。赤壁。白桶。緑瓦。十三層……光林寺。隋に宏業寺。
〔13〕
瓦をおく。……（大理石の蓮台）。天井半なし。〔挿画〕仏柱
……《見開き25》
堂。升山とその妻……諫草亭〔挿画〕庭 牆 祠堂 □□□
……《見開き29》
p384 ○浴徳堂。……鉢の石榴。〔挿画〕
……《見開き29》
（カーギ）。
白石清
……《見開き31》
劉少々。〔報主筆（法源寺）思君五十……劉喜奎。五十成家無
結果、無限風流流罪在我。〕張勳。袁克文。崔 金少梅
……《見開き33》

注四十八
Mukden 910
Suchiatun 934 P.m.
Antung 510 A.m.
Keijo 950 700 P.m.
Fusan 580
Shimoseki 540 P.M.
7:10 P.M(12)
750 P.M(23)
8:22 A.m
Osaka

○一藍の暑さ照りけり巴旦杏
……
○ Like Water under thin ice.

【「手帳」遺失部】

注一 樸原直樹「葛巻文庫の芥川自筆資料―ノート・断片・草稿・手帳―」一九九八（平十）年三月「藤沢市文書館紀要」21号。
樸原氏は具体的には挙げていないが、「六」には26箇所、「七」には8箇所の省略や異同があると指摘している。今回の水沢の調査では「六」には55箇所、「七」には35箇所を項目として立てたが、数量は観点によっても変動するであろう。

注二 本稿では岩波書店版『芥川龍之介全集』は、新版全集の「後記」の出版年による分類に倣い、1927(S02)～1929(S04)を〈元版全集〉、1934(S09)～1935(S10)を〈普及版全集〉、1954(S29)～1955(S30)を〈小型版全集〉、1977(S52)～1978(S53)を〈前回全集〉と称する。

注三 「手帳(六)」の四月十一日から三十日分の欠落については、注

p385 ○郎世寧百駿図。雍正六年歲次戊申仲春臣郎世寧恭図。
南京豆 甘藷 栗 太麻(口口)
○途中。南口ホテル。机の上に……男女とも分からぬ子供耳輪に

……《見開き35》
き草。Alpenへ登る人が持ち帰る草。……造林の為なり。
〔挿画・判読未了〕
……《見開き36》

天黒し。豪雨すぎし後と見えて路川の如し。柳。風強し。馬。
〔見て〕

洞 p386 のせる。○山は……「地しぼり」の黄花。〔挿画〕2 洞 17 1
……《見開き38》

……《見開き41》
寺倪。陸の賛……烟客老親家題董宰為。〔挿画〕乾隆像 乾隆□

p387 上衣(衫)。裙子。褲子。禁 華烈 褐 大毛 中毛 小毛 背心
……《見開き43》

○褲子。底裙子。(縁レ支)背心。緊身(底衣衫)〔挿画〕爽緊身。
……《見開き47》

p388 房。壁紙(洋風)。Bed……壁上の掛物。啖吐。〔賦〕(藥)
〔藤沢市文書館蔵〕
……《見開き49》



墨竹妙。八大山人の画。金俊明の梅。銭杜……の花弁冊。方若家。

1の樸原氏の調査報告にも指摘がある。

注四 中根駒十郎に依頼した『夜来の花』の献本の宛先と一致する。
中根宛書簡(1921<T10>3.09)には「書留の受け取りは御面倒ながら上海日本領事館気付にて小生宛御送り下され度候」とある。きちんと送付されたか否かの確認の為の控えか、送付依頼に際しての人選メモか。後者とすれば、この手帳の使用開始時期は三月九日以前ということになる。

注五 滝井孝作の号。

注六 この「手帳」は大阪毎日新聞社の「社員手帳」であり、会社の情報として「特置員及通信員」の項がある。その「海外通信員」の「支那」の項に、「天津日本租界常警街 天津 西村博」とある。「雑束一信」の「十八 天津」の「西村」は、「上海游記」及び「長江游記」の西村貞吉とは別人か。「西村さん」という敬称を付けた呼び方や、「郷愁」についての語り方は、「長江游記」(二 蕪湖)の西村貞吉の「お前なんぞは何時でも帰れるぢやないか」云々の場面とは質的に異なるだろう。なお、全集の索引は西村禎吉に解釈している。

注七 宗方小太郎(1864～1923)。東亜同文会や東亜同文書院の設立に関わる。「江南游記」(八 西湖)に所出。

注八 「江南游記」(二 車中(承前)に、よく見る広告として「仁丹」や、齒磨き・煙草の広告の双嬰孩牌香烟。無敵牌牙粉が挙げられている。仁丹は一九〇五(明治三八)年に発売。当時から〈広告益世〉を事業目標の一つに掲げ、その広告活動は第二次世界大戦までの日本の広告界において突出していた。仁丹は中国市場をも見越した命名であり、大陸では「万病の薬」としてこれを売る仁丹売りが各地に見られた。〔「世界大百科事典」平

凡社 1986「仁丹」の項）。注二十五の補注参照。

注九 岡千仞(1833～1914)の号「**鹿**」は、岡鹿門の「鹿」。仙台藩出身の漢学者。佐藤一斎の門下の安積良斎の門下の陽明学者。一八八四(明治一七)年に中国を訪れ、李鴻章と会談して日中善隣を論じた。『觀光紀游』は「奇遇」に所出。芥川が旅行前に関心を持った観光案内書の一つ。全十巻(合本で三冊)、一八八六(明治一九)年八月刊。友人や門人の序にも「鹿門岡君」「鹿門岡先生」という呼称が見られる。

注十 「上海游記」(十一 章炳麟氏)、「江南游記」(六 西湖)に所出。

注十一 「上海游記」(二十一 最後の一瞥)に所出。

注十二 殷汝驪(1883～?)。上海震旦大学、早稲田大学経済科卒。民国五年に財政次長に就任。弟の殷汝耕と共に革命運動に携わる。

注十三 段祺瑞のことか。「上海游記」(二十一 最後の一瞥)、「北京日記抄」(二 辜鴻銘)に所出。

注十四 「上海游記」(十三 鄭孝胥)に所出。これによれば芥川は二度訪問している。後にも登場するため、その一回目の記録と思われる。

注十五 鄭孝胥の子。「上海游記」(十三 鄭孝胥)に所出。

注十六 「蔑」は「錢」の略字。

注十七 芥川の友人の小澤碧童の家の屋号。(伊藤一郎氏の示教による。)魚屋を営む傍ら、目薬を製造販売していた。碧童の母の「はな」の実家は、浜町の河岸の「高八」という有名なはんべん屋であった。「高松八五郎」は「高八」と関係あるか。また、「キ文」は同じく浜町の待合いの「喜文」のことか。(伊藤一郎「聞き書き」父・碧童と思い出の人々―小澤朝女さんに聞く―「湘南文学」28号 1994.3 参照)。

注十八 この二行は前掲の原資料(見開き15・左頁)の右下の「がひ」の右側に位置するため、そこに連続する記述の可能性もある。なお、見開き15・左頁は注一に掲げた樸原報告の37頁に写真がある。

注十九 錢穆(1895.7.30～?)の筆名の「梁隱」と関係あるか。

注二十 李人傑(1890.4～1927.12.17)(原名)李書詩(字)人傑(号)漢俊(筆名)李漱石、李人傑、海鏡、海晶、晶鼎、先進、汗、漢(藤川正典編『現代中国人物別称総覧』汲古書院、一九八六年)。「上海游記」(十八 李人傑氏)に所出。この「手帳」はペンと鉛筆で書かれているが、「李人傑」は毛筆で一文字2 cm四方ほどの大きさで書かれている。毛筆書きは他に「手帳(七)へ見開き29」の「白石清」。これは作品に登場しないが、「上海游記」の李人傑の記述の様相を見ると、現存しない別のメモの存在が想定される。

注二十一 ヨハン・アダム・シヤール(Johann Adam Schall von Bell 1591～1666)と生没年が一致する。ドイツのジュスイット会の宣教師。中国名は湯若望。「徐家」の徐光啓と共に天文学に基づいた『崇禎曆書』の編訳を成す。北京で没。

注二十二 マテオ・リッチ(Matteo Ricci 1552～1616)と推定される。イタリアのジュスイット会の宣教師。中国名は李瑪竇。「徐家」の徐光啓を会させた。前注のアダム・シヤールと共に、「上海游記」(二十 徐家)に関わる記述と思われる。直後の「章炳麟」との会見は四月二六日の佐々木茂索宛書簡には「章炳麟などの学者先生に会った」とあり、四月三〇日付の沢村幸夫宛書簡には「徐家」は領事館がまだ見物許可証をくれない」とあるので、実見記録ではないだろう。

注二十三 李鴻章の戸籍上の次子。(『東洋歴史大辞典』へ平凡社 1936)

は嗣子とするが、戸籍上は甥の経方が養子で嗣子)。字は李曄。別名、李高。1887～1936。駐独公使、駐英公使などを歴任。皇帝溥儀の幼少時の家庭教師に英国人 R・F・ジョンストンを据えたりもしている。(ジョンストン『紫禁城の黄昏』第一章、岩波文庫 p34。芥川の沢村幸夫宛書簡(1921<T10>4.30)に「章炳麟、鄭孝胥、李経(う)邁等の旧人、余毅民李人傑等の新人に会ひました」という記述がある。芥川の上海滞在は計三回で、記述位置から推してその二回目か。駐日公使李経芳は、李鴻章とともに日清講和条約の調印者であり、また、金玉均暗殺事件(1894(M27)～)にも関わっている。暗殺は上海の日本旅館東亜(和)洋行で行われた。そこは芥川の最初の宿でもあり、「上海游記」(二 第一瞥(上))に所出。なお、この面会は四月二七日(青柳達雄「芥川龍之介と近代中国序説」『関東学園大学紀要』14(1988.12)の指摘による)。また、李経邁のその他の伝記については青柳達雄(「李人傑について―芥川龍之介『支那遊記』中の人物「言語と文芸」1986.9)を参照されたい。

注二十四 「江南游記」(一 車中)にも、「この車掌はオリヅ色の洋服に金筋入りの大黒帽をかぶつてゐる」とある。ここより手帳の記述が「杭州行きの汽車」(同)についてのものであり、「上海游記」と「江南游記」との素材の分かれ目であることが確定できよう。

注二十五 「江南游記」(八 西湖(三))に所出。余白の多い見開きに大きく一文字1.5×1.5 cm程の大きさで書かれている。前出「李人傑」(見開き15)と同様に現存しないメモが想定される。↓補注
また、旅程からすればここまでが杭州の記録であり、この直後には上海の二度目の滞在記録があるべきであるが、次頁から

蘇州の記録となる。この構成は「江南游記」の構成と一致しており、この時点で杭州、蘇州、鎮江、揚州、南京方面を一纏めにしようという意図が存したのかもしれない。少なくとも未見の「徐家」を含め、上海を一纏めにしておこうという意図が推測される。

注二十六 「江南游記」(二十一 蘇州の水)に所出。

注二十七 「江南游記」(十三 蘇州城内(上))には「驢馬」に乗っての旅が描かれており、旧版全集編纂時に誤字、或いは略字として訂した可能性もあろう。

注二十八 「月見障子」は挿画の注記。

注二十九 『湖南の扇』には「彼女は水色の夏衣装の胸にメダルか何かをぶらさげた、如何にも子供らしい女だった」という記述もあるが、「江南游記」(二十四 古揚州(中))には「この画舫に乗ってゐるのはいづれも女ばかりである。しかも棹をとつたのなどは、日本めかしい御下げの髪に玫瑰の花をさしてゐる。」とある。

注三十 「上海游記」(二十一 最後の一瞥)に所出。直前の「コシヤマクレル」は「長江游記」(二 蕪湖)の素材であり、同時に書かれた物ではないだろう。比較的に空白の多い頁に書き入れてしまったか、旅行記作成にあたってはこの上海の記録が次の「鄭孝胥」とともにさほど重要でないという判断があったと思われる。なぜなら、芥川の上海再来は未見の徐家・見学が主要目的であったと思われるからである。しかしその徐家・の実見記録がここには無く、最後の方の『見開き48』に出てくる。それはこの二度目の上海滞在中でも徐家・見学の許可がまだ下りず、実現しなかったことを意味しているよう。芥川は五月五日の芥川道

章宛書簡には「二三日中には蘇州南京から漢口へ行くつもり」と述べており、この時点では南京から上海に戻って三度目の滞在をする計画はなかったようであるからである。既に吉利支丹物を幾編も書いている芥川にとって、徐家は必見のものであつたらう。「上海游记」の章の構成は必ずしも「手帳」と一致していないが、二十章「徐家」が二十一章「最後の一瞥」の直前に置かれていることと、二十章「徐家」が旅行記という枠組みを超えた虚構であることもこれを証している。この書簡を書いて後、徐家・見学の許可が未だ当分下りないことが分かり、杭州の後に十頁の空白を蘇州方面用に空けてこれら二回目の上海滞在の記録をここに記したのではないだろうか。

注三十一 上海マナージメンクラブ(上海商館)の略。

注三十二 「上海游记」(十三 鄭孝胥)の素材。鄭孝胥は『新版全集』の三六三頁にも所出。前注参照。鄭孝胥訪問の二度目の記録と思われる。なお、新版全集第八巻の「月報」(p6)に鄭孝胥の家の玄関で撮った写真が掲げられている。

注三十三 挿画は二つあり、一方の注記は判読未了。

注三十四 「長江游记」(四 廬山下)に「白楽天と云ふ名前を、ハクラクと縮めてしまふ」とある。

注三十五 「江南游记」(二十一 蘇州の水)に所出。

注三十六 中国語。相手の発言を肯定する返答の言葉。芥川はさほど中国語の会話を学ばなかったようであるから、この語は意識した数少ない語彙の一つと見てよいだろう。「湖南の扇」には「譚は勿論得意さうに是了是了などと答へてゐた」という記述がある。

注三十七 石田幹之助宛書簡(1921<T10>531)には、「葉德輝の蔵書

見たり 葉先生今蘇州にあり あの蔵書三十五萬巻皆充払ふ意志ある由」とある。これは「35万巻」、「葉尚農(德輝)」という記述と重なるため、「手帳」の原本は「紺の馬掛子」の所から別の《見開き》になっているが、挿画も含めて一連の叙述とみてよいだろう。


注三十八 文脈上、「洞庭湖」であり、芥川の誤記と見做して元版全集編纂時に訂したものか。

注三十九 「上海游记」(二十 徐家)に所出。前出のシヤールやリッチもこれに関わるものだが、ここには碑の挿画もあり、実見記録と思われる。芥川の上海滞在は計三回で、記述位置から推してその三回目と考えられる。

注四十 徐文定は、「上海游记」(二十 徐家)に所出の徐光啓の諡。芥川は沢村幸夫宛書簡(1921<T10>430)には「徐家・以外大抵一見をすませましたと記しており、この後の見学記録かと思われる。

注四十一 このあたりの七五調の句は他の部分とは異なり、縦書きで右から左へと普通に書かれている。見せ消ちの推敲の痕跡や記述順序の錯綜もあるが、元版全集の整理に異論がなく、また、その錯綜ぶりは写真版でなければ再現し難いために詳細を示せなかった。原資料を確認願いたい。

注四十二 「北京日記抄」(二 雍和宮の「それから又中野君と石畳の上を歩いてゐたるに、万福殿の手前の楼の……」という記述に対応するか。「△○」は挿画であるが、記号的でもあるので翻刻した。塔を示すと思われる。

注四十三 この直前には  という記号があり、挿画内の記号の説明となっている。

注四十四 「北京日記抄」(五 名勝)にも「靈官殿」とある。

注四十五 直後の「コロニギボシユの鉢多し」は挿画の注記。
注四十六 人名か。前の「劉少々」(1870-1931)・「張勳」(1854-1923)、袁克文(1890-1933)も人名であり、崔も劉喜奎や金少梅と並んで、人名と推測される。なお、袁克文は袁世凱の子。
注四十七 「手帳」一頁分、判読未了。単純な草の絵があり、「Lodd □□□□re」のような単語を何度も書き連ねており、スベリングの確認と思われる。

注四十八 奉天。中国、東北地方の都市。現在の瀋陽(Shenyang)。
注四十九 蘇家屯。南満州鉄道安奉線の乗換駅。奉天の南方9.7哩。
注五十 安東。

注五十一 「Ke□Jo」(京城)に「KeJo」と訂正があるため、帰路の時刻表を事前に写した可能性が高い。さもなくば後に別の記録から写したものか。

注五十二 京城。現在のソウル。

注五十三 釜山。

注五十四 「Shinoseki」とあるが、下関のこと。従来、門司への到着とされている。釜山から門司への便の存在は未考。

注五十五 大阪。七月一二日の夜に奉天を立った芥川は、帰京の途中で報告のために大阪毎日新聞に立ち寄っている。この行程をまとめると次のようになる。天津から京奉線で奉天へ行き、南満州鉄道本線で蘇家屯、南満州鉄道安奉線で安東、京義本線で京城、京釜本線で釜山、連絡船(1905<M38>就航)に乗り換えて下関に着く。下関から大阪までの船便もあったが、船か汽車かは未考。「雑信一束(二十)」の「南満州鉄道はこの帰路の安奉線の記述か。

補注(注二十二の補注) 「油炸塊」は油で人体を揚げる中国での

死刑方法の一種と関わる記述。揚げたり塩漬けにしたりして処刑した人体を食すこともあり、『湖南の扇』には斬首の際の血を染み込ませたビスケットが登場する。唐の玄宗時代に陳蔵器が『本草拾遺』に人肉を入れ、以後の本草書に薬材として定着した。明代の実学を代表する李時珍の『本草綱目』も「人部」を立てている。

『湖南の扇』では、「脳味噌の黒焼きなどは日本でも嚥んでゐる」、「北京日記抄」(三十 利海)では「人丹(仁丹にあらず)」と述べている。この人丹が人間の肝臓から作った薬とすれば、ヘ文明国への名の下に隠蔽された日本の薬と称する食人習慣をこの旅行で再意識したのかもしれない。日本には幕府から斬首を委任されていた浪人の山田浅右衛門家の「有名な家傳の製薬(山田丸、浅右衛門丸、人丹などと稱)(永島孫一「首斬浅右衛門吉利」伝記伝記学会1936)があった。平田篤胤の『志都能(しづのう)石屋講本(下)』にも「謂ゆる人丹で。牢屋の浅右衛門薬とか云て。勞證(肺結核)など用ひるは此れだやな」(1811)とある。「手帳(六)」には「江南游记」(二 車中(承前))に引用された、よく見る歯磨きや煙草の広告の「双嬰孩牌香烟。無敵牌牙粉」と並んで「仁丹、獅子牙粉」が記述されており、「仁丹にあらず」という注記は、そのような「広告」化されるものとの相違を示しているよう。(注八参照)。「仁丹」は「上海游记」(一 海上)にも「手帳(六)」の《見開き9》にも登場しており、「仁丹にあらず」という但し書きを無視した筑摩版全集の「日本の仁丹のこと」という注は不可解である。「手帳(六)」の終わりの方には「人食ふ人背も矮く、ひそと声せず、身じろがず。」という七五調の句も見える。同じく「手帳(六)」には『湖南の扇』の素材ともなった「刀にて首を

斬る。支那人饅頭を血にひたし食ふ」という記述もある。彭春陽（芥川龍之介と魯迅―「湖南の扇」と「薬」を中心として―明治書院1990『近代日本文学の諸相』）はこの記述を踏まえた上で、魯迅の「薬」の影響を指摘しているが、人丹を奪い合う話の里見弴（ひえみんとり）（中央公論1917（1906）の衝撃もあろう。しかし芥川は、『羅生門』から死体の髪を再利用する老婆を描いている。「江南游記」（二七 南京）には「人間の皮を縫ひ合はせた、華奢な女の靴があるかもしれない」、「北京日記抄」には「急に病を発し、人間の脳味噌を管めるより外に死を免るる策なし」云々と記している。死体の利用に関する記述は他の作品や未定稿などにも頻出する。〈身体論〉的な検証も望まれる。中国の排日運動と日本の幕末の攘夷とを合わせ鏡にして〈東洋〉を映し出す言説と、このような近代日本の暗部とを並置する作者の戦略の意図は、日本の文明国家性の相対化にこそあったらう。

人丹の「薬價は丸薬で浅蜷貝より少し大きい程度の貝殻一杯が明治の初年に於て金五圓」（永島孫一 同前）と高価であった。（一八七〇（明治三年四月十五日、販売禁止。）これは商品になる良質の肝臓が五人に一人ぐらいからしか採れなかった為氏家幹人『大江戸死体考』1993平凡社新書参照）であるから、脳味噌は人丹より安価であったらう。脳味噌の値段は不明。一例にすぎないが、明治末に〈人油〉（人間の油）が密売価格で一合50銭（『東京日日新聞』1908.3.14）。「脳味噌の焦げたのは肺病の薬」（『江南游記』二）とあるように、日本でも頭蓋骨や陰茎とともに何れも「超絶の効能」（『公文録』刑部省より弁官への諮問△870.03△内閣文庫のある万能薬（主に結核の薬）とされた。「脳味噌の黒焼き」は、「灰色となり瓦の小片の如き形状」（『東京朝日新聞』1908.4.11△3.1

じであつたらしい。但し、芥川に結核の病歴はない。『芸者被召出新規御切米御扶持方被下候書付』（内閣文庫）には、一七一五（正徳五）年の項に扶持高二百俵の医師として同姓の芥河元泰（『寛政重修諸家譜』によれば「芥河」は「芥川」に同じ。）を記録し、また、一七一一年に小石川薬園の西半分の和漢の本草の管理を任された同姓で「東照宮御代」からの幕臣の血筋の芥川小野寺元風（『家譜』内閣文庫。正知の曾孫。元風以後世襲。）や一六六二（寛文二）年に「桜田御殿御書院番」となった「平國香末流」を称する芥川元孝（同前）なども存するが、これらと芥川家との関係及び、龍之介の幼少時の芥川家と医業との関係は未考。

付記

本稿作成にあたっては、藤沢市文書館の全面的協力を得た。特に資料専門員の中村修氏には本当にお世話になった。ここに改めて記し、謝意を表したい。

（本学非常勤 みずさわ ふじお）

【藤沢市文書館の紹介】

所 在 神奈川県藤沢市朝日町12番地の 6 〒251-0054
電 話 〇四六六（二四）〇一七一
交 通 JR藤沢駅北口より徒歩8分
駅の東北東170m程。藤沢郵便局前の交差点の東側。
休館日 土曜、日曜、祝日・休日
※葛巻義敏の他、荒畑寒村などの文庫あり。

